



寿司屋にて

秋吉君

寿司屋にて 3

夏祭り 8

寿司屋にて

定一寿司のテーブルに黒田教授と座るのは、これで四回目だ。

教授は御年五十九歳、学者として円熟期に差し掛かっている。

「なあ秋吉君僕がまだ二十歳のころね、団藤大先生と洋食屋に行って、ハヤシライスなんか呼ばれたことがあってだね」

黒田教授は芦屋の出身で、ご馳走になることを「呼ばれる」と言う。

「当時ハヤシライスなんてものゝハイカラな料理でねえ秋吉君」

定一寿司でアルバイトをしているキヨちゃんが、白魚とアジと煮蛤の握りをのせた漆の皿を持ってきてコトンとテーブルに置く。

キヨちゃんの本名は確かキヨミだったはずだが、キヨリだったかもしれない。常連は「キヨちゃん」と呼び、ねじりはちまきの大將は「おいキヨ」と呼び、若作りの女將さんは「ねえキヨリン」なんて呼び方をする。

黒田教授は話を中断して、テーブルを離れようとするキヨちゃんのおしりに手を伸ばす。キヨちゃんは慣れたもので、くるりと上手に腰を回し、灰色に骨張った教授の手を避ける。若竹色の和服である。薄くて和紙のような生地のおしりの奥に肉付きの良いおしりが盛り上がっていて、下着のラインは見えない。あの薄い布きれの向こうは何も着けてないんだろうかと僕は気になる。

「つれないねえキヨちゃんは。どうだ今年こそは軽井沢の別荘へ遊びに来ないか」

「ヤですよ先生」キヨちゃんは奥の厨房へ入った。つやつやと張りのある声だけが返ってくる。

「私、海が好きなんだもの」

僕は純米大吟醸久保田万寿の入ったコップを中指と親指でつまみ上げ啜り啜り上目で奥を見ると、厨房の小窓から顔をのぞかせたキヨちゃんと目があつた。

「それでね秋吉君、団藤大先生はハヤシライスを食べながら言うんだよ、『黒田君学問の道は深く濃く渋く切ない。浜辺の砂を一粒一粒拾っては捨て拾っては捨てそうして日がな一日砂粒の数を数えるようなものだ』」

僕は漆器にのった綺麗なアジの握りに箸をつけた。アジの脂と醤油が混じりてらてら光っている。

「大先生がそんなことを言ったのには理由があつてね、僕はそのころちつとも真面目に学問しなかった。同期に林田というのがいて、これがまた、まさに日がな一日砂粒を数えているようなそんな地道な努力家だったんだ。大先生は言った。『黒田君、爪の垢を煎じて飲むという言葉があるがね、ほんの少しでも林田君の爪の垢を分けて貰ってはどうかね』なんてね。僕は冗談じゃないと思った。なんだ林田みたいなあんなちんちくりんな奴。それで言ったんだ、『教授、お言葉ですが、私はもっと大きな学者になりたいのです。林田なんかのじゃちつともダメです。どうか教授のお爪のお垢をお呼ばれされたく』」

爪の垢だのなんだの汚いこと言いやがってと心中罵りながら僕は煮蛤を口に運んだ。煮汁がよくしみこんでいて、噛むたびに甘辛くほんのり潮の香りを含んだ汁が口中に広がる。

「大先生はすっかり気分をよくされてね、ワッハハハと大声でお笑いになった。僕の方はというと、すっかり大口を叩いてしまったからこれはいかんと次の日から必死の猛勉強だよ」

キヨちゃんが次に持ってきた皿には、中トロとポタンエビとコハダがのっていた。定一寿司のコハダは伝統的な江戸前で、酢でぎゅうっとしめてある。

「時に秋吉君、キミもそろそろアレだね」

「はあ、アレといいますと」

「決めなくちゃね。残るのかどうするのか」

黒田研究室の五年上の先輩が九月からワシントン大学へ留学に行くので、助手のポストが一つ空く。その空席を狙っている同輩が僕のほかに二人。今年助手の席を逃した場合、これ以上留まっても先はないから、研究室を去らなければならない。教授の紹介で他の大学へ行くか、どこかの高校の教諭に収まるか。

「それは勿論、残れるものなら残りたいです」

「まだまだ努力が足りないね秋吉君。ちょうどキミは二十歳のころの僕と同じ、どうも腹が据わってないね」

「はい自覚しています」

「自覚してるだけではダメだね、努力しなくっちゃ。僕の爪の垢でも煎じて飲むかい」

「……」

教授は真顔だった。僕はコハダを摘もうとのぼした箸を引っ込めて、テーブルの上に置いた。確かに僕には真面目さが足りなかった。寿司屋の娘の尻を眺めて下着を履いてるのかどうか気を揉んでいるようではダメなのだ。

「どうだ、飲むかい」

「え、あ、はあ……」

黒田教授は足もとに置いたカバンからなにやら取り出して、テーブルに置いた。小さな茶筒だった。

「団藤先生からお説教を頂いた日からね、僕は必死で勉強した。と同時に教訓を忘れまいと思って、爪の垢がたまるたびにかき集めてはここに溜め込んでおいた」

黒田教授が茶筒の蓋をぽんと開けて見せてきた。黒々と乾燥したひじきのような物体がびっしりと筒の中に詰まっている。

「げえ先生」

「げえとは何だ秋吉君」

「いやしかし」

「僕の後輩が離島の私立高校で校長をやってるんだが、教員が足りなくてねえ秋吉君」

「の、の、飲みます飲ませてください」

「キヨちゃん、ちよっとこれでお茶淹れてくれるかな」

「はあい」のびのびと艶のある声が厨房で跳ねて、キヨちゃんがテーブルに来る。「なんですか？ これ」

「中国のお茶だよ。大変貴重なものでね、秋吉君に是非飲んでもらおうと持ってきたのだ。あ、

僕は要らんからね。一杯だけ持ってきて」

ややあって、キヨちゃんは厨房から戻ってくると寿司屋の巨大な湯飲みをテーブルに置いた。なみなみと茶が注いである。

僕は唾を飲み込み、教授の顔を見る。黒田教授は興味津々、双眼をうるうる爛々きらめかせて僕を見ている。年季の入った不潔きわまりない代物を煎じて飲んだらどうなるのか、単にそれを観察しただけなのではないか。そんな疑惑が頭をよぎる。

湯飲みを手取る。焦げ茶色の液体が湯気をたてて揺らめいている。僕はそっと鼻を持っていき匂いをかいだ。顔をあげると、厨房のキヨちゃんと目が合った。キヨちゃんはにっこり微笑んだ。

僕は湯飲み口に口をつけ、ぐいっと一息に茶を胃袋に流し込んだ。

「どうだね」

湯飲みをテーブルに置くと、黒田教授は僕の顔をのぞき込んだ。

「深く濃く渋く切なく、学問の道かくの如くならんと心に染みいりました」

「ふん、ようし気に入った。悪いようにはせんよ秋吉君。さあお祝いしようじゃあないか。若い刑法学者のために」黒田教授は背筋を伸ばしてグラスの冷酒を飲もうとしたが、空になっていた。

「キヨちゃん、酒持ってきてくれ。乾杯だ」

黒田教授は明るい声を出したが、僕は教授の横顔に一瞬射した陰りを見逃さなかった。思いの外僕が平然と飲み干したので、拍子抜けして内心がっかりしたに違いない。

教授がトイレへ行くために席を立ったのと入れ違いに、キヨちゃんが久保田万寿の一升瓶と新しいコースターを持ってやってきた。

「あ、ありがとう、あのお茶……ウーロン茶と入れ替えてくれたんだね」

「ねえ秋吉さん」キヨちゃんは僕の言葉には応えず、言った。「大学は、夏休みもお忙しいんですか」

「いや、そんなことはないよ。休もうと思えば休める」

キヨちゃんは一升瓶をテーブルに置き、コースターを取り替えた。そのときキヨちゃんの掌が僕の手に触れて、暫く重なったままになった。

「私、海が好きなんですよ」

教授がトイレから出てくると、キヨちゃんはくるりと腰を回してテーブルを離れ、厨房へ隠れてしまった。

さてこれは後日談。夏の間僕とキヨリは急速に親しくなった。盆休みに伊豆へ行き、浜辺で寝そべっていた時のこと。

「そういえば、あの時は本当にありがとう」僕は寿司屋でのことを思い出して言った。

「なんのこと？」

「ほら、黒田先生がヘンなお茶を持ってきて僕に飲ませようとした時……ウーロン茶と取り替えてくれて」

キヨリは上半身を起こし、太ももについた砂を指で払った。

「……ああ、あれ。取り替えてないよ。もともとウーロン茶だったから」

「え？ そんなはずはない。あれは爪の……」

「大将の入れ知恵。前の日にね、黒田先生が一人でお店に来て。今度秋吉さんを助手にしようと思うんだけど、今ひとつ研究に熱が入ってないんじゃないか。どうしたもんだろうと大将に相談したの。爪の垢の話は、大将が修業時代に銀座の七代目六兵衛さんから言われたこと。大将が先生に話したら、そのネタ僕に貸してくれって」

「それでひと芝居うったのか。それにしても、あの時なんで教授は暗い顔をしたんだろう」

「どうしてこうまでしてやらないと、あいつは積極的になれないのだろう」

「え？」

「黒田先生が大将に言った。こんな芝居をうたないとあいつあ動こうとしない、困ったもんだって」

「そうか、そうかもしれないな」

僕があくび混じりに言うと、キヨリは体をこちらに向けてむっとした顔を見せた。

「黒田先生の表情には気がついて、私の表情には気がつかないんだ」

「え？」と僕が言うより早くキヨリは僕に覆い被さって唇を合わせ、すっと離れた。

「どうしてこうまでしてあげないと、積極的になれないの」

僕は起き上がり、露わになったキヨリの肩に手を置こうとした。キヨリはするりと上手に体をねじって僕の手を避け、立ち上がった。そして僕に向かって口を尖らせてみせると、海へと走って行ってしまった。

夏祭り

「秋吉君、今夜空いてるかい。浜北町の祭りに行こうよ」と同じクラスの園田が誘ってきたのは七月十日土曜日のことだ。その日最後の授業が終わって俺は、机の中から溜まったプリントを取り出しカバンに詰め込んでいた。「僕は美也子と一緒にいくから君は白鳥を誘いなよ」

俺は白鳥優羽と高校一年の時から付き合っている。園田がつい最近沖美也子に告白して良い返事もらったという噂は聞いていた。二人きりで出かけるのはまだ恥ずかしいのだろう、それで俺を祭りに誘ったに違いないと思った。携帯でメールを打つとすぐに優羽から返事が来た。優羽は喜んでいるようだった。

帰宅して昼食を食べた後、自室のベッドに寝転がってマンガを読んでいるといつの間にか眠ってしまい、気がついた時には午後六時を回っていた。俺は慌ててポロシャツに着替え家を出た。

待ち合わせ場所は浜北町の駅前だ。自転車から下りて駅舎へ向かう途中のファストフード店の前に優羽は立っていた。すらりと伸びた体に薄紫の浴衣をまとった優羽は遠くからでも目立った。優羽は背が高い。本人は背が高いことを好ましく思っていないようで、長く細い首を少し前へ傾けるような格好が癖になっていた。優羽は俺に気がついて手を振った。

「どうしたの急にお祭りに行こうだなんて。最近全然デートしてなかったから嬉しくって、浴衣着てきちゃった」優羽ははしゃいでその場でくるりと体を回転させて見せた。そして俺の腕に自分の細く白い腕を絡ませる。

遅れて園田と沖美也子が手を繋いで現れた。園田は緊張しているのか固い表情で顔が赤黒い。

俺たちは矢志貴神社へと歩き出した。商店街を抜けると川に突き当たる。浴衣を着た男女や子ども達が橋を渡って神社へと向かっていく。遠くから太鼓の音がする。橋を渡り終えたとき、生ぬるい横風が吹いてどこか魚の腐ったような臭気を感じた。

矢志貴神社の前の通りが車両通行禁止になり、幅の広い道路の左右に屋台が並ぶ。「わあ」と優羽は華やいだ声を上げて俺の手を引く。鳥居の傍に設置された狐の石像が、つり上がった目で虚空を見つめている。電柱にくくりつけられたスピーカーから録音された祭り囃子が平べったく聞こえてくる。

ヤキソバ、たこ焼き、焼き鳥、フランクフルト、焼きトウモロコシ。食べ物を焼く煙が陽の暮れかけた空に舞い上がり、子どもの歓声がきんきん響く。どん、どん、どんという太鼓はスピーカーからではない。神社の境内に設置された和太鼓を誰かが叩いているのだろう。

「ねえ何か食べようよ」

優羽に引っ張られながら人混みを分けて行くと、お好み焼き屋の前に出た。腕まくりしたひげ面の男が脂で顔中テカらせながら、鉄板の上でヘラをカチャカチャ鳴らしている。お好み焼きを二つ買う。次に手を引かれて辿り着いたのはイカ焼きの屋台だった。醤油を塗ったイカの肌が餛飩色に輝くのを見て優羽は「食べたい」と言う。イカ焼きを一本買う。優羽は強い力で俺の腕を引く。今度はじゃがバター、鶏の唐揚げ、フライドポテト、牛串。「懐かしい」と声をうわずらせながら優羽はチョコバナナとリンゴ飴をねだる。

前に行く園田と美也子を見ると、二人は手に缶ビールを持っていた。喉が渴いていることに気がついた。俺もビールを買い喉へ流し込む。幾ら飲んでも乾きは癒えない。それどころか益々喉は焼け、呼吸をするたびに鼻の粘膜にこびりついた腐臭が体内に流れ込む。

「ねえ金魚すくいやっていい？」熱気で顔を赤くした優羽が幼稚な上目遣いをする。

「あ、私もやろうかな。一緒にやろうか」そう言って美也子は優羽の手を引いた。きつく握られていた優羽の手がようやく俺の手から離れ、一瞬美也子と目があう。口の端が笑ったように見えた。手の甲を見ると、優羽の爪に搔かれた跡がミミズ腫れになっていた。

「なあ秋吉君、キミ、東京の大学へ行くって本当か」園田が俺の隣に並んだ。赤黒い顔は疲れているように見えた。「白鳥はどうするんだい。彼女も進学するのか」

俺は、いいやと答えた。

「じゃあどうするんだ。君が東京へ行くって彼女にはもう話したのか」

俺は生返事をした。

「それにしても白鳥は背が高くてスタイルがいいな。あんなに沢山食べても太らないのか」

俺は返事をしなかった。

「あ、おい秋吉君どこへ行くんだ」

陽がすっかり暮れている。人混みをかきわけて元来た道を引き返す。一歩進むたびに喧噪は古びたレコードのようにざらついた音に変わり屋台の光は灰色に褪せ祭り囃子は途切れ途切れ浴衣は色を失い子どもは見る間に老いて男女は波にさらわれる砂のように形なく崩れていく。

生臭い空気を吸い込み気がつく、俺は橋の欄干にもたれて川に浮かぶ月を見ていた。

「こんな所にいたのか秋吉君」園田の声がした。「白鳥がちょっと、気分悪いって」

三人がこちらに歩いてきた。優羽は長身を美也子に支えられて、青ざめた顔で俯いていた。

分かってる、いつものことだ。俺はそう言って、美也子に代わって優羽の体を抱きかかえながら、土手を下りて川のふもとへ優羽を連れて行った。お好み焼き、イカ焼き、じゃがバター、鶏の唐揚げ、フライドポテト、牛串、チョコバナナとリンゴ飴を全て川に戻して、優羽はごほごほ咳き込む。食事のたび繰り返されることだ。嗅ぎ慣れた腐臭が俺の顔に当たる。優羽の口から茶色の唾液が垂れ糸を引く。

「逃がさないから」優羽は苦しそうに息を吐きながら言う。「絶対に、逃がさない。東京だろうがどこだろうが、追いかけていくから」

俺を見上げた目、その目は充血し細くつり上がり狐の像そっくりだった。遠くから平べったい祭り囃子が聞こえてくる。

寿司屋にて

<http://p.booklog.jp/book/35014>

著者：秋吉君

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/akiyossy/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/35014>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/35014>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.